

Transcultural Studies Newsletter

No 5

Spring 2020

〈教員エッセイ〉

コロナ禍でこそ「スペシャリスト」より「ジェネラリスト」に！

中澤 達哉

早稲田で学んだ日々

垣内 景子

新型コロナウイルス流行後

井上 文則

令和2年度の幕開けにあたって

伊川 健二

雑感（2020年7月）

河野 貴美子

On the Pandemic and Other Matters

Edward Chan

Reflections During a Global Pandemic

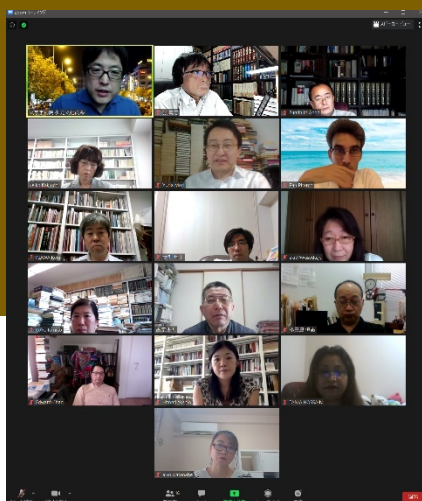
While Listening to *Belle and Sebastian Write About Love*

Hitomi Yoshio

《論室から》 小二田 章 寺嶋 雅彦 杉田 貴瑞

多元文化論系
ニューズレター

第五号



Transcultural Studies *Newsletter № 5*

Spring 2020

裏表紙写真：Zoom 利用によるオンライン会議の一コマ（2020 年 7 月）

コロナ禍でこそ「スペシャリスト」より 「ジェネラリスト」に！

中澤達哉

現在、みなさんは、世界史上稀な現状を目の当たりにしています。新型コロナウイルス感染症（Covid-19）が猛威を振るい、2020年7月14日現在、世界の感染者総数は1000万人を超え、死者数は50万以上にのぼっています。Covid-19は、中世のペスト、近代のコレラ、そして、100年前のスペイン風邪を想起させるほどの歴史的な疫病といえるでしょう。

この事態を受けて、早稲田を含む国内、そして世界の大学は対面授業を断念し、Zoom等によるオンライン授業に切り替えました。いったいだれが1年前にこの事態を想像できたでしょうか。私の専門は歴史学です。歴史学は過去の出来事を正確に調べ、真実に近い過去の姿をより客観的に復元しようと試みる学問です。それゆえ、歴史家に未来を予言しようとする人はいません。やるとすれば、歴史の教訓を現代に伝えることくらいでしょうか。コロナ禍の混乱した現状をみると、もしかすると既存の多くの学問分野は、未来を言い当てるところか、現在についてさえ本当は何もわかっていないのかもしれない、と思うときがあります…。

これに対して、ひとつの学問分野に偏らない多元文化論系はユニークです。文学・哲学・歴史学など複数の学問分野の学際的スタッフがそろい、なおかつ、アジア・ヨーロッパ・アメリカ・日本と多様な地域をカバーしています。国内屈指の学際的な地域研究機関なのです。私は常々、多元文化論系の学びの特徴を、物事を複数、少なくとも3つ以上の角度からみる力を養えることだと学生さんに述べています。これこそ文学部と異なる際立った特徴だと思います。ひとつの手法から物事を突き詰めて徹底的に深く掘り下げるスペシャリストを育てるのが文学部だとしたら、多元は複数の手法から物事を多角的・多面的にみることができるジェネラリストを育成する機関なのです。コロナ禍を乗り越えるだけでなく、ポストコロナの時代をリードしていけるジェネラリストがみなさんであり、そうした人材を育てるのが多元です。今こそ多元文化論系で学ぶ意義があるといえるのです。

（多元文化論系運営主任）

早稲田で学んだ日々

垣内景子



はじめまして、2020 年 4 月に着任した垣内景子です。母校での新たな出発に、大いに張り切っていたのですが、オンライン授業との格闘が最初の仕事となってしまいました。いささか拍子抜けの残念なスタートになってしまいましたが、これから徐々に皆さんともお会いできるものと楽しみにしています。

私は、学部から大学院まで一貫して早稲田大学の東洋哲学専攻で学びました。ですから、このたびの母校での再出発に際しては、何だか久しぶりに生まれ故郷

に帰ってきたような、懐かしい気持ちで一杯です。私が学生時代を過ごしたのは 40 年近く前になりますから、早稲田界限も、キャンパスの建物もすっかり変わってしまいました。そもそも、当時、文化構想学部はありませんでしたしね。それでも、立て看の並ぶスロープを歩いたり、今でも残っている数少ないお店を見たりすると、気分はすっかり青春ブレイバックです。

学部の学生時代、私は文芸サークルの活動に夢中になっていました。夢中になりすぎて、専攻進級に失敗した結果、東洋哲学専攻に進むしかなくなってしまったのですが、それが今では自分の一生の仕事になっているのですから、人生はまったくわからないものです。

いわゆる文学少女であった私は、当時、文学作品の良さを科学的に分析できないかという、今思えばとんでもないことを、真剣に考えていました。サークルの勉強会で出会った文学理論の一つフォルマリズム（形式主義）は、文学作品はすべて形式に還元できると豪語し、文学作品の文学性は形式（構造）においてのみ分析できるという威勢のいいスローガンを掲げていました。当時、読書会という名の飲み会を繰り返し、文学作品を好き嫌いの印象批判でしか語り合えない自分たちにうんざりしていた私は、この魅惑的なスローガンにいたく心を動かされました。

とはいえ、形式をどれだけ細かく分析していても決して核心には迫れず、

むしろ細かくしていけばいくほど求めているものからは遠ざかるようで、どれだけ細かくしていても掬い取れない何かがあり、その何かこそが最も知りたい作品の文学性なのではないかというのが、偽らざる実感でした。フォルマリズムとの出会いによって、私が文学作品を科学的に分析することができたわけではないことは言うまでもありません。それでもなお、文学を科学する方法はこの道しかないという信念と覚悟で歩み続けたフォルマリストたちの姿は、感動的でした。どれだけ迂遠に見えても、手っ取り早く「内容」の方から手を着けなかった彼らの良心に、当時の私は強く魅せられたのです。

結局、私は文学とはまったく異質の哲学・思想の世界に身を置くことになりました。少なくとも専攻進級が決まった当時の私には、東洋哲学という分野が何をするとところか見当もつかず、まったく途方に暮れていたのを覚えています。それでも、東洋哲学専攻で出会ったすばらしい恩師のお蔭で、自分なりの研究対象を見つけることができ、今に至るまでその研究を続けています。

私の専門は「朱子学」ですが、今改めて考えると、私が「朱子学」に興味をもったのは、形式主義に感じた共感と同じものを朱子の思想に感じたからではないかという気がします。そして、今私が朱子学について解き明かしたいと考えているこ

とは、かつて幼稚ながらも考えていたこととよく似ていることに改めて気づかされます。何とも進歩のない、情けない話ですが、でも意外とその人の考え方のベースやパターンは若い日に出来てしまうのかもしれません。何を専門にしたとしても、結局は同じことを考え続けるものなのでしょう。そう思うと、今に至るまでの私の研究者としての道のりは、かつて考えていたことをきちんと語るための素材と場所を得るための長い長い迂回路であったような気がします。



朱熹 生於八百八十年

此山夫子之墳 墓
春日
對夫元城而作
仙閣
石壁題書求生者後月
相室而閣中我主教時
小山水精義成英第月
志為同月後教心 明月
添輝
陸阻于楊水朱閣水搭
等事 千和事 歷 五文
加
才學難生後陳水官
六溪湖地難立規
應澤堂
雲溪林陰堂
史亦一編
石室書林隱書 陽月
山齋
屏上樓上頭 樓下屋

新型コロナウイルス流行後

井上文則

えっ、オンデマンド授業？、本当ですか？、Zoom？、Zoom って何ですか？（ちなみにこの質問を会議で実際にした時には、スマホでもできます、と教えられて、よかった～と安堵したのを覚えています。実は、自宅のパソコンが古くて、カメラもついていなかったのです。結局、新しいパソコンは仕方なく買いましたが・・・）。これが3月末の私の率直な感想でした。そもそも私は保守的な人間です。保守的といえば、まだ聞こえがいいかもしれませんが、要は新しいことが面倒なだけです。愛読書はギッシングの『ヘンリ・ライクロフトの私記』、と言えば分かる人は、私がどんなタイプの人間か分かると思います。その『ヘンリ・ライクロフトの私記』の中で、主人公のライクロフトは「私は世間の傍らをす通りし、歴史こそ人生だとおもっていた（平井正穂訳）」というフランスの歴史家ミシュレの言葉を自分の理想として引用していますが、私もこれに共感します。そして実際、私も歴史の本を読みながら、世の中の流れとは距離をとって生きてきました。

ですが、今回ばかりは、そうはいきませんでした。さすがにオンデマンドの講義と Zoom の利用はせざるを得ませんでした。しかし、やってみると悪いことばかりではありませんでした。まずオンデマンド講義は、私の場合は、スマホで講義を録画してレジュメと一緒に Moodle にアップするのですが、実際に人前で講義をするよりも、落ち着いて話ができるのに気づきました。何年教師をやっても、大勢の人前で話すのは緊張しますので、ついいつも早口になってしまうのですが、スマホの前で座って話をしていると、実に落ち着いて話せるのです。一方、Zoom はゼミなど、演習系の授業で利用するのですが、私のゼミでは学生さんの出席率が上がりました。電車に乗って出てくるのは億劫になることがあるのですが、Zoom の URL くらいはクリックしてくれます。結局、私自身はオンラインにすっかり馴染んでしまいました。考えてみれば、私のような無精者にはオンラインは、親和性があるのかもしれませんが。とはいえ、学生さんからすれば、大学生活のかなりの部分がそぎ落とされてしまっていますし、まして1年生はいまだに大学にも来ることができないという状態は解消されるべきで、対面授業が望ましいのは言うまでもないでしょう。

変わらないのは、本を読んで原稿を書くという生活で、この春学期には、



オンライン授業風景

久しぶりにというのも変ですが、専門分野の原稿を書いています。私の専門分野は古代ローマ史で、中でも3世紀の軍人皇帝時代です。この時代のローマ帝国は政治的軍事的危機に陥っていました。その上、深刻な疫病も流行しました。この疫病は、記録した司教の名を取って「キブリアヌスの疫病」と呼ばれています。正確な病名は分かっていませんが、はしかやウイルス性の出血熱、あるいはインフルエンザがその候補として挙げられています。軍人皇帝時代に関することは、これまで幾度も書いてきましたが、私自身は「キブリアヌスの疫病」を重視したことはありませんでした。人類の歴史に疫病が重大な影響を及ぼしてきたことは確かなのですが、実はたいていの歴史家は疫病や気候変動などの自然現象で歴史が動いたと言われると抵抗を感じます。これらのことは自然科学者の領域であり、歴史家は自分では立ち入って検証できない事柄には、どうしても懐疑的になってしまうからです。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行とその影響を見ると、歴史と疫病の関係について考えざるを得なくなりました。「歴史は現代との対話である」というのは、歴史家E・H・カーの有名な言葉ですが、今回、この言葉を改めてかみしめています。

令和2年度の幕開けにあたって

伊川健二

いまこの時を共にしているすべての関係者にとって、決して華やかな幕開けではなかったことに贅言を要しまい。この記録は、これまでの経緯を振り返りつつ、前向きかつ慎重に、とくに学生のみなさんにはは過ぎしてもらいたいとの気持ちとともに執筆されている。

新型コロナウイルス（Covid-19）感染拡大が、東京圏で深刻視されるようになったのは、2月3日に横浜港に到着した客船ダイヤモンド・プリンセス号の乗客が上陸停止となった前後ではなかっただろうか。同月27日に早稲田大学は卒業式および入学式の中止を発表した。密閉、密集、密接の空間で人々が集うことが、感染拡大の原因とみられたためである。これに伴い、日本文化史ゼミによるパーティーも中止の旨を学生に連絡した。卒業生を思うにつけ、やるせない気持ちはぬぐえなかった。彼らには9月卒業式への列席が認められるため、その際にパーティーをしてみてもどうかと提案をしているが、どうなるだろうか。

変化はこれだけではなかった。上記の動きは、むしろ変化の序盤に過ぎなかった。3月になると研究会、最終講義などの中止が次々と発表される一方で、会議のみは対面での実施が継続された。ご退職の先生方、新入生など、この時期に人生の転機を迎える方々の思いを察するに余りある。3月半ば頃には、世間でオンライン授業の有効性が浮上した。「無観客試合ならぬ無学生授業をやらされる羽目になるのだろうか」と、冗談まじりの感想を友人に吐露した記憶がある。この気持ちはいまでも心の片隅に残ってはいるが、その後、春学期の授業は原則オンライン実施とする方針が発表され、開始日は5月11日、12回授業の改定学年暦が策定された。

それでも、ある段階までは早期収束への期待があったように思う。政府による東京オリンピック延期容認が発表された3月23日、筆者は4月初めが切替時期だった通勤定期を更新してしまった。非常勤先の某大学からは3月なかばに、授業は通常通り4月初旬に開講される旨の通知があった。

東京などの大都市圏で感染が徐々に拡大し、イタリアやニューヨークなどの惨状が連日報じられるなか、4月7日に政府により1か月間の緊急事態宣言が発せられ、都道府県により外出自粛等が要請された。この宣言は、のちにさらに約1か月間延長されることになる。ちなみに自粛とは「自分から進



んで、行いや態度を憤むこと（デジタル大辞泉）」である。諸橋轍次『大漢和辞典』には立項されていない。早稲田大学では構内への立入が禁止された。

大学でもオンライン化への動きが本格化し、4 月以降は会議で使用するほか、オンライン講習会もおこなわれ、Zoom や、Waseda Moodle と連動する Collaborate などの選択肢があること、実施方法もオンデマンド方式のほかライブ配信があることなどが共有された。元来ものぐさな気質から、通常授業と極力同様の要領で進めうる、ライブ配信を選択し、Collaborate を使用することとした。Zoom では、部外者による授業妨害などの問題点が指摘されているからである。

授業のオンライン化には、教員よりも学生の方が冷静に対応している印象がある。これはひとつには、若さゆえの柔軟さであり、もうひとつには受け手側の気楽さがあるのかもしれない。オンライン授業開始直後には、接続に問題があることをチャット機能で訴える学生に対して、他の学生から解決策の提案がされる場面をしばしば目撃し、快い気分であった。6 月 18 日には、学生の主導で、ゼミのウェブ飲み会を開催した。

とはいえ、就活の縮小、アルバイトの停止など、経済活動「自粛」による、学生への影響が思いのほか深刻なことは懸念される。そのなかで、内定を勝ち取った方々は、その重い結果が今後の人生の大きな励みになるだろう。経済的な面ばかりではなく、今学期からゼミ生となった 3 年生は、いまだ一同に会する機会もないまま、もどかしい思いをしているに違いない。

すべての感染症にはいずれ必ず収束の時がくる。他方で、現時点では第二波の到来が憂慮される。一般に 20 代が重症化するリスクは限りなく低い。しかしそれはゼロではないし、高齢者と同居する学生も少なくないはずである。いまは我慢の時であることは、残念ながら動かし難い。だが、会えない期間、すぐには報われない努力が、次の段階での情熱や、さらなる創造力、忍耐力を育むこともよくあることである。対面授業がどの段階で復活するかは、いま（6 月 28 日時点）は予断を許さないものの、その時にはひとまわり成長したみなさんにお会いできることと確信している。

（写真：近所の堤防の桜 4 月 6 日撮影）

雑感（2020 年 7 月）

河野貴美子

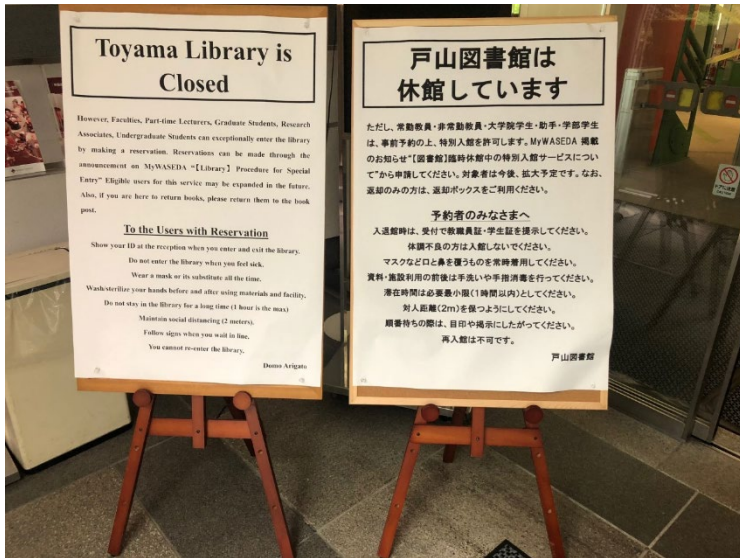
今春は、ヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で 1 か月間、日本漢文学をテーマとする集中講義を行う予定でした。渡航手続きのため公証役場にまで出かけて各種書類を準備、イタリア大使館に行ってビザも取得し、いざ出発、という時になって、外務省が発出する感染症危険レベルが引き上げられ、急遽渡航を断念せざるをえませんでした。出発の前日のことです。

イタリアは二度目、しかしヴェネツィアは初めてでしたので、街歩きや美術館巡りも楽しみにしていたのに、残念でした。しかしそうした思いにうちひしがれるまもなく、「仕事」が始まりました。カ・フォスカリ大学から、予定していた 15 回の講義を全てオンラインで行うとの連絡が入り、春休みは「Moodle」との格闘に明け暮れることになりました。

おかげでこちらは、早稲田の授業が始まる前に「Moodle」の仕様に多少なりとも慣れることができました。また、4 月末に予定していた北京大学での出張講義もオンラインでということになり、対面で海外の学生や研究者と直接交流することができない損失の大きさはひしひしと感じながらも、それと同時に、オンラインによって「代替」できることは、可能なかぎり開発していくべきことの重要性も身にしました。

それにしても、書物を対象とする研究領域に取り組み、日ごろから本に埋もれた研究室に籠もっている身としては、「ステイホーム」はとてもつらいことでした。そしてまた、有数の蔵書量をほこり、かつきわめて便利な図書館をもつ早稲田の研究環境の有り難さを改めて痛感しました。大学図書館が、予断を許さない制約がある中で、蔵書の郵送サービスや、最大限安全に配慮したうえでの予約入館を始めたことは、容易ではない決断だったはずです。

とはいえ、大学の図書館が週に 1 度、1 時間のみしか使えないという今の状況は、学問の危機といっても過言ではないと思います。この（やむを得ない）制限、制約によって一人一人の知の営みがどれほどの遅滞を余儀なくされているか、それが大学全体、日本全体、そして世界の至るところで生じている事態であることを考えると、気が遠くなりそうです。なお、書籍や論文など、情報のデジタル化は、私が知る限りにおいてですが、例えば中国や韓国のほうが格段に早く進められていました。日本の場合には、著作権の保護など、慎重な施策によって守られてきたものもあるわけですが、ともかく、



図書館の利用が遮断されてしまったことの影響は甚大です。

思い起こすのは、以前オックスフォード大学を訪れたとき、各カレッジの宿舎に併設されている図書館は、夜間は ID カードで入館できるようになっていて 24 時間利用が可能だったことです。いまは日本でもデジタルテキストで読むことができる書籍や論文ももちろん増えています。が、書架の間を進み、居並ぶ書物たちの中から本を選び、手に取りページをめくる、図書館におけるこうしたいわば「からだをつかって読む」という行為は、やはりとても大切なことではないかと考えます。

ただ、この未曾有の事態を受けて、変わるべきところは変わり、創意工夫によって未来を切り拓いていく努力は続けなければなりません。ちょうどいま、あるオンライン・ワークショップ（「テキスト遺産の利用と再創造」2020 年 7 月 18 日実施予定）の準備をしています。ホームページなどを通じた告知に対して、日本各地、またアジア、北米、欧州などさまざまな地域からの参加希望が寄せられています。早稲田で開催していたならばあり得なかった形で、多くの人がとが集うワークショップとなりそうです。オンライン・ワークショップの準備を進めながら、まだ当面は続きそうなこの状況下で、何ができるのかを学び、模索しています。

（写真：戸山図書館にて 2020 年 7 月 9 日）

On the Pandemic and Other Matters

Edward K. CHAN

To all of you Tagenbunka students, I applaud your efforts to deal with the abnormalities caused by the COVID-19 pandemic. Your patience is greatly appreciated by myself and I'm sure other teachers, as well as the university. I realize some of you are having a difficult time in various ways. Although the conditions during the 2020 Spring Semester haven't been ideal, I am encouraged by the effort put out by a lot of the students to adjust to the online format. Of course university students around the world are going through the same thing, but hopefully we can all return to something close to "normal" by next year, if not by this fall. It might be overly positive for me to say, but I do think adaptability is something that you do and should learn as a university student. From what I've seen in my own classes, most students have been doing just that. One thing I would encourage all students to do is provide feedback to teachers about how things are going for you as students in terms of the online learning. It's not always obvious for us, and certainly there is room for improvement.

I do, indeed, miss the face-to-face interaction with students that we traditionally experience with in-person classes. I, for one, rely on and feed off of that. In the United States, with which I am more familiar, the university community is discussing not only what the best ways to teach and learn online are (a practice that has already existed for many years), but also how online teaching practices can be incorporated into regular teaching in the future. Some universities in the United States are talking about doing a hybrid of in-class and online teaching for the fall semester, while some are planning to return to the "normal" practices, even if that involves the cliché "the new normal." We'll have to wait and see how things play out and what the Japanese government and Waseda University decide based on the conditions in the fall, but I do hope we teachers can at least have some face-to-face interactions with students.

In my own classes, I've been using different approaches: live Zoom lectures (with occasional Moodle activities), Zoom discussions for smaller classes, as well as on-demand recorded lectures for larger classes or those that involve a lot of switching back and forth between various PC tools. Coming from an



American background, I always encourage students to engage in class discussions, whether in person or online. While part of this involves differences in university “cultures” between the United States and Japan, practicing and developing your ability to express yourself orally in addition to in writing can be a great talent to take with you to whatever you decide to do after graduating.

I am often publicly critical of my home country (the United States) in general and of the current president in particular. It has been disheartening to see how poorly the United States is handling the pandemic, not only but certainly substantively due to a lack of ethical leadership. To be sure, I am also critical of Japan’s response as well—I agree with those who call for more testing in Japan. Luckily, the rates of death and infection have been relatively lower in Japan than in other countries like the United States, but . . .

Although this is not directly related to the COVID-19 pandemic, I would like to take this opportunity to also comment on what’s currently happening in the US related to the Black Lives Matter movement and the recent killings of George Floyd, Rayshard Brooks, and Breonna Taylor by the police (in addition to countless others), as well as Ahmaud Arbery by white people who are likely racists with guns. These killings are part of a long lineage of police brutality directed especially at young black men and other racially motivated murders, but we do seem to be reaching an historical moment in the United States—some have called it a sea change. More and more white and other non-black people there are starting to realize what black communities have known for a long, long time. It’s great to see people from many races and racialized ethnic groups joining with African Americans to protest against this type of violence. It was also great to see some people in Tokyo showing solidarity with the Black Lives Matter movement; I regret that I did not know about the Tokyo march and so didn’t participate.

Despite how bad things are with racial violence in the United States and the pandemic around the world, I remain optimistic that things will get better, even though it will be a difficult fight.

Reflections During a Global Pandemic

While Listening to *Belle and Sebastian Write About Love*

Hitomi Yoshio

In March 2020, I flew to New York with my family in the hopes that we could get out of Japan soon enough to avoid being barred entry to the United States, where I had a conference to attend. Since my daughter's kindergarten closed and switched to remote learning at the end of February, I figured I could get there early to do some research while my husband and daughter explored the playgrounds. When we arrived at JFK on March 5th, fully aware of the news of the spreading of Covid-19 in Japan, I felt like the protagonist in Tawada Yoko's post-3.11 story "The Island of Eternal Life," in which the immigration officer was petrified by the protagonist's Japanese passport due to fears of nuclear radiation. In the following two weeks, the situation was reversed as the numbers began to skyrocket in the U.S., and one city after another declared a state of emergency. When the conference was cancelled and New York was on the brink of a lockdown, I knew it was time to go back.

Following our return to Tokyo, we stayed mostly indoors except for daily walks in the neighborhood. I became busy with the regular routine of my daughter's remote learning, where I learned how to become a kindergarten teacher through teaching her phonics, math, art, music, PE, and even drama. Every morning, we had three or four pages of instructions on what to do that day, plus Google Meet sessions with her teachers and classmates four times a week. As challenging as that period was, I will forever be grateful for being able to witness the amazing process of a child beginning to read and write and express herself creatively through art and music and play.

As Waseda's spring semester approached, one month later than usual due to the global pandemic, I came to be aware of how much I missed being connected to our students. I missed their enthusiasm and receptivity to learning, and seeing their friendships form and grow before my eyes. My zemi students had asked to meet before the semester began to "check in," so we got together one weekday afternoon on Zoom. We were sharing the same space virtually, each neatly contained in a black box lined up next to one another. As strange as that was, we all felt connected somehow, and I realized once again what a privilege it was to be part of these brilliant students' lives.

As the semester started, the initial awkwardness of Zoom quickly turned into familiar space. In the same room where I learned to wear a kindergarten teacher's hat, I embraced my new role as digital instructor. I shared screens and put students in breakout rooms for group discussion, as students adapted to new ways of learning and being actively involved in the class. In a way, we could see one another more closely than in real life, even though we were physically far away. To accommodate for technical challenges, but also aware of how much students needed to connect, I decided to hold the classes both synchronously and asynchronously, incorporating new forms of technology by assigning podcasts and video presentations instead of written documents.

For my zemi classes, which are presentation and discussion based, it made sense to hold the class real-time via Zoom sessions. I asked the 4th-year zemi students to pre-record their research presentations as narrated PowerPoint videos, which were streamed during class followed by live session feedback and Q&A. Students prepared more rigorously than usual to make their presentations articulate and visually attractive, and also encouraging for the 3rd-year zemi students who could watch the videos at their own pace.

For my "Contemporary Japanese Fiction in English Translation" seminar, I held real-time classes for the first two sessions to get to know one another, and the rest was a mixture of my prerecorded lectures and students' weekly podcast responses. I was amazed at how much effort the students put into the podcasts, and how they seemed to be enjoying the format as if they were radio show hosts. It reminded me that no matter how informative or eloquent the professor's lectures may be, what students remember are things they said or produced themselves. Through the podcast assignments, I was able to hear from students more than I ever would in a classroom setting, and students were able to learn from one another in a creative and stimulating way.

I'm currently co-teaching an intensive Academic Skills in English course for the first year JCulP students. These students have never met one other, have never set foot on campus except for their admissions interviews back in December. In previous years, we had gone on class excursions to Ueno and Shibuya to research the Linguistic Landscape of Tokyo, but this year, we are planning to have a virtual excursion in Miami with students from Florida International University. I'm excited for the possibilities and new forms of global connectivity that digital technology presents us, even as I eagerly look forward to the day when we can meet one another in person.



(写真：由尾瞳ゼミ Seminar on Diversity in Japanese Culture)

《論系室から》

4月に前任の佐藤さまから引き継いで講師（任期付）になったのですが、出勤3日目にして緊急事態宣言により論系室のイスを惜しむ暇なく自宅生活に。オンライン授業の準備にひたすら追われ、（主任と助手以外）論系の人々と触れあえない日々が続いていました。6月に入り、大学に入った時に、その閑散たるあり様に、あかるをみてもおつるなみだは…の感慨にふけてしまいました。…と、湿っぽい感傷はここまで、少なければ少ないなりに、日々うるおいを、論系に盛り上がりをも！ということで、HPを見てみたらびっくり仰天、なぜか私の専門が「こども文化」になってる～～？（確かに現在、私の日常のそこそこは5歳の息子が占めていますが…）その後まもなく訂正されましたが、改めて申し上げますと、私の専門は「近世中国史、特に地方志の編纂、さらに東アジアの地方史誌の編纂」です。

決まり文句の「論系室で会いましょう！」はしばしお預けですが、ぜひ授業（演習や講義）、論系イベントでお会いするのを楽しみにしています。

小二田 章 多元文化論系 講師（任期付）

誰がこんな事態を予想できたでしょうか。少なくとも私は予想できませんでした。オブティミストである私は、春学期のスタートは1か月遅れるものの、GW明けには論系室を開ける日常が戻ってくるだろうと思っていました。ところが、感染者数の抑止は劇的な改善を見せず、春学期は原則すべてオンライン授業ということになり、論系室は春学期最後まで開室しないこととなりました。秋学期についてもオンラインを基本とすることが発表されました。

こんな状況にあっても学びを続けている皆さんに対し、論系室としても何かお役に立てればとの思いで、メールをつうじた LA 制度を運用することとなりました。すでに HP や先生方の授業を通じて告知いただいています、ざっくりと西洋系・東洋系という大きなくくりの下、二人の大学院生の方に担当していただいています。学生の皆さんの学びをより充実したものにするためにも、日々の授業でのちょっとした疑問やレポート作成の方法などについて、ぜひ LA の方に聞いてみてください。tagenbunkala@gmail.com

寺嶋 雅彦 多元文化論系 助手

唐突ですが、昨年度多元の論系室は模様替えを繰り返しました。正直に言えばスタッフの気分転換もありましたが、多元学生みなさんに使いやすい配置を考えたからです（うまくいったかは自信がありませんが…）。残念なことに、春学期みなさんに成果？を披露する機会はなくなってしまいました。

しかし、時間は刻々と過ぎており、立ち止まることは許されません。春学期はもうすぐ終わろうとしています、秋学期には重要なイベントが盛りだくさんです。ゼミ・卒研ガイダンス、進級ガイダンス、多元文化学会、そして最終学年の学生にとって最も重要なゼミ論・卒研の提出（考えたくもないという人もいるかもしれませんが）などなど。とりわけ2年生にとってゼミ・卒研の選択は卒業までの大事な場面です。オンラインが続いたとしても、ホームページ・Twitterでの周知を通して可能な限りお手伝いしたいと思っています。みなさんもぜひ論系情報をチェックしてください。しかし、あきらめの悪い私は、いずれ論系室でお会いできることをまだ楽しみにしています。

杉田 貴瑞 多元文化論系 助手

[編集後記]

ニューズレター第5号をお届けします。

オンラインでゼミや演習の授業なんて、一体どのようにすればよいのだろう——外出もままならず、自宅に逼塞して、Waseda Moodle の複雑さと用語のわかりにくさに頭を悩ませ憂鬱になっていた4月頃に比べて（10年以上文句ばかり言ってきた CourseN@vi を懐かしみつつ）、実際におっかなびっくりで授業を始めてからは、学生たちと、ああでもないこうでもないとあれこれ試みながら、Zoom でのゼミもなかなか棄てたものではないと思えるようになってきました。ひさびさにパソコンおたくの虫が復活してきたというのもあるのですが、学生たちと顔をあわせておしゃべりをする日常を取り戻せたというのがなによりのことでした。

それでも、学生のみなさんが、さまざまな不便や不安とともに生活を強いられ、数ヶ月先、半年先のことも不透明なままの今日、先生方から、学生のみなさんへのメッセージと、先生方ご自身の苦心と日常とを伝えてもらえないか——そんな思いから第5号には多元文化論系の先生方に原稿をお願いしました。

2020年4月から多元文化論系の運営主任が、高屋亜希先生から中澤達哉先生に交代しました。中澤先生には巻頭にご挨拶をいただいています。

また、同じく2020年4月より、多元文化論系に新しく垣内景子先生をお迎えすることになりました。垣内先生は森由利亜先生とともに「東アジアの生命観と倫理ゼミ」を担当されます。ご着任とともに新型コロナウイルス対策のためにオンライン授業の開始となり、学生のみなさんと直接教室で交流することのかなわない状況ですが、本号には、みなさんの先輩として、かつて早稲田で学んだころの思い出を寄せていただきました。[源]

多元文化論系 ニューズレター 第5号

2020年7月25日 発行

編集代表
発行
Web 掲載

源 貴志
早稲田大学 文化構想学部 多元文化論系
PDF 版
